

- WAVE／感動の金メダルは素晴らしき敗者たち ————— 島村 俊治… 3
- アクセス ナウ！／なぜ、体育を教えるのか ————— 鈴木 寛… 4
- 羅針盤〈第67回〉学校体育について大いに語ろう！  
 (1) 座談会：新しい「資質・能力の3つの柱」をめぐって  
 菊 幸一／友添 秀則／松田 恵示… 6
- (2) これからの小学校体育：私はこう思う  
 ①リズムダンス審査員として思うこと ————— 佐竹 康峰…12  
 ②幼児期の“遊び”が小学校体育を変える ————— 吉田伊津美…13
- 実践報告①／オリンピック・パラリンピック教育 (東京都葛飾区)  
 ・「うごいて かかわる」オリンピック・パラリンピック教育 — 木室 忠明…14
- 実践報告②／《「デジ体」を使った授業》2年生・マットを使った運動遊び (宮城県仙台市)  
 ・児童が「わかった」「できた」という実感をもてる授業を目指して - 小寺 正洋…18
- 連載／外野席から〈第40回〉  
 ・男を育てる共同体の喪失 ————— 岡崎 満義…22
- 〈新企画〉Live Lessons 〈第1回〉／4年生・4ゴールサッカー (東京都中央区)  
 鈴木 康夫／鈴木 聡／菅 佑也／森井 愛満…24

※本文中に表記の勤務校は、平成28年3月末日のものです。

## ◆◆◆ 著者紹介 ◆◆◆



木室先生◆小学6年生のときに1964年東京オリンピックに出会い、世界のありようやスポーツに関心をもちました。特別支援、体育科、学校経営の改善に40年努めました。4月からは幼児教育にかかわっています。



松田先生◆自然災害の甚大さに、言葉がありません。過去の大震災のときも、ただ、できることをするしかありませんでした。でも、振り返ってみると、前には向かっていました。復興が少しでも早く進むことを心から願います。



小寺先生◆昨年度は、市内小学校サッカー大会で初出場、初優勝を果たしました。今年も連覇を狙っています。体育・保健・食育が連携した「からだづくり」の取り組みを基盤に、楽しく明るい生活を営む児童の育成に励んでいきます。



菊先生◆この3月末で3期6年間務めた大学院専攻長の任をようやく終え、ホッとしているところです。これまで時間をかけて読めなかった海外文献にじっくり向き合えることに、今からワクワクしています。



鈴木聡先生◆テレビ会議システムを使って研究室で授業を参観し、ゼミを行っています。研究室にしながら授業研究ができる時代が来ました。「ビデオでも同じでしょ」と思われるかもしれませんが、やはり「LIVE」の力はすごいです。



友添先生◆清原選手の覚せい剤使用、野球賭博、FIFA汚職、ロシアのドーピング問題など、スポーツの世界は倫理問題に揺れ続けました。こういった難問をどう解決するか、スポーツの「学力」が問われています。



鈴木康夫先生◆教員として3年目を迎えました。現在は3年生を受けもっています。日々四苦八苦しながらも、研究授業やダンスの大会など様々なことに挑戦させていただける環境で、かかわってくださるすべての方に感謝しています。

**オ**リンピックの素晴らしさは、人と人が戦う中で筋書きのないドラマが展開されることだ。夏冬8回のオリンピックの実況中継で私は、11個のメダルを伝えてきた。そのなかで金メダルは3つ。水泳の鈴木大地と岩崎恭子、スピードスケートの清水宏保。いずれも劇的な金メダルだった。

日本選手のメダル獲得を伝えることより、オリンピックのドラマや人間模様を伝えたいと念じていたら、“幸運”が近づいてきたのだろう。メダルよりも、世界のアスリートたちの全力を尽くす姿、素晴らしき敗者たちに激しく心を打たれたものだ。

ロサンゼルス大会では初めて女子のマラソンが採用され、酷暑の中、ジョーン・ベノイトが独走で優勝。『女性だってちゃんと走れることを証明したかったのよ』とウーマンリブを見せつけた。が、ヒロインはもう一人いた。精根尽き果て、ヨロヨロと右に左に今にも倒れそうになりながら、ランナーが競技場に入ってきた。助けを受けると失格になると本能が知らせるのだろう。競技役員が差し伸べる手を彼女は拒む。放送席の私は心を引き締めた。『泣くな、叫ぶな、慌てるな』絶叫調の“怒鳴り実況”は私のやり方ではない。出場リストで名前を探すと、スイスのガブリエラ・アンデルセンという。ロシアム9万人の大観衆は『ゴー、ゴー、ゴー』と大合唱。『美辞麗句の形容詞は避けよう。映像がすべてを語っている』と自分に言い聞かす。『もう少しです。ゴール、イン』。極、平凡だが心を込めて全身全霊で完走を伝えた。オリンピックのみならず、スポーツは敗者もまた素晴らしく、美しい。“マラソンはゴールしたすべての選手が勝者といえるだろう。人生のゴールが様々あるように”。

バルセロナ大会、陸上男子400m準決勝、日本の高野進が初めて決勝に残

## 感動の金メダルは 素晴らしき敗者たち



スポーツジャーナリスト  
**島村 俊治**

れるかという注目のレース。高野は中盤まで4位、5位争いを展開した。この中には、優勝候補の英国のデレク・レドモンドがいる。第3コーナーでアクシデントが起きた。なんと足が<sup>かが</sup>つり、屈みこんで走れなくなってしまった。高野の決勝進出は間違いなくなった。ドラマはその後、起こった。棄権したとばかり思ったレドモンドが足を引きずりながら歩いていた。役員の制止を振り切ってコーチの父が肩を抱きかかえ、二人三脚で歩いているではないか。父は息子を抱きかかえながらゴールインした。完走とは認められないが最後までゴールに向かう姿が尊いのだ。無念の涙にスタジアムは大きな拍手を送り続けた。これがオリンピックなのだ。栄光もあれば、挫折も失意もある。歓喜もあれば残酷もある。人生がオリンピックに、スポーツに散りばめられている。

子どもたちにオリンピックの真の姿を教えてほしい。メダルはその一部に過ぎないのではなからうか。

リオ大会は初の南米開催と画期的な大会だが、不安定で危険がはらむ国内情勢、競技場の建設遅れ、ジカ熱の発生と前途は多難のようだ。IOCや競技団体のオリンピックの方向性にも、競技によってプロしか出られなかったり、年齢制限があったりして、“参加することの価値観”が歪められているように思える。ただ、そうはいつでもオリンピックが平和の祭典であり感動の宝庫であることに変わりはない。メダルだけではなく、立派に戦う選手たち、日本だけでなく、世界の国々に関心をもつような「オリンピック教育」をしてほしい。次の東京オリンピックを見据えて。

●  
しまむら・としはる 1941年、東京都生まれ。早稲田大学卒業後、NHKへ入局しスポーツ実況を担当。NHK退局後は、Jスポーツで主に大リーグ、プロ・アマ野球、プロバスケットボールを担当。著書に「笑顔と涙をありがとうー成田真由美：車椅子の金メダル奮戦記」(PHP研究所)など。2002年より国士舘大学大学院客員教授。

# なぜ、 体育を教えるのか



## ■知育・徳育と体育

知育・徳育・体育といいますが、すべては身体の健全な発育があってこそなので、体育はすべての基盤です。同時に、実は知育や徳育に対して、体育は大きな影響力をもっています。

今の成熟社会では、全力で自分の能力を高める、広げることが少ない。発展途上にある社会は、いわばアメとムチで、勉強すればいいアメがもらえ、しなければ不利益があるため、全力でがんばります。しかし成熟社会においては「勉強してもしなくてもそんなに変わらない」という、ある種のしらが蔓延しています。その中でスポーツだけは、全力を尽くして自分の限界に挑み、その可能性を広げることが体感できる。その意味で、最大の徳育になっています。

また、学習指導要領でも学校教育法でも、「多様な他者との協働」といった言葉が出てきます。「多様な他者と協働」とするのは何か？ スポーツはコラボレーションであり、多様な能力をもった人たちが1つのチームをつくっていく。だから多様な他者との協働ということ、同じく体で体感しながら学んでいく。これも徳育です。今後はソーシャルコンピテンスが、知識やスキルよりも重要になってきますが、社会性とスポーツは密接につながっています。サッカーボール1つあれば、すぐにコミュニケーションが始まる。まさに言語の壁を超えて直ちにつながり合えます。社会性の獲得と体育とは、表裏一体です。この2つの意味で、徳育に最も資する教科のひとつが体育ということになると思います。

知育についても、知識自体は検索すればわかります。知識を活用して、どう思考し、判断するか、そして表現するかが極めて重要です。スポーツは、リアルタイムの判断とコミュニケーションです。

だから、あるタイプの思考力、特に判断力を養うことになります。また、表現力については、今いちばん欠けているのが身体表現です。スポーツ、体育はまさにアナログな身体表現です。デジタルを媒介した表現は放っておいても、このデジタル社会では行われるでしょう。学校教育では、放っておくと家庭や地域、社会で失われていってしまう大事なことを扱うべきです。その意味では、今子どもの発達にとって大切なのは、身体性の回復です。まさに身体表現、あるいは身体的な感覚を磨いていくことを知性、身体知としたときに、実は体育、スポーツというのは極めて知的な、知育の源でもある。運動が脳の活性化に直結するという研究もありますが、その意味でも、知育の源に体育あり、ということだと思います。

調査では、1週間に1時間以内しか運動しない中学生女子が4割程度います。さらに都会では、自由な遊び場がどんどん減っている。この20年～30年を振り返ったときに、いちばん子どもの生活の中で失われたものが外遊びです。そこには、都市化の問題、少子化の問題、塾通いの早期化などのいろんな複合要因がある。だから学校では、体育で意図的に子どもたちの運動経験、運動習慣を身につけさせていく。それが、知育や徳育の基盤になります。学校教育としての体育の重要性は、我々の世代に比べてさらに増していると思います。

## ■身体性—個別性—多様性

これからは、多様性を尊重する方向、つまりインクルーシブな方向に社会がシフトしていきます。身体は、2つと同じものはない。個別性、そこが身体知の重要なところ。みんな手の長さも足の長さも違う。つまり多様性を求めることは、ある意味、身体性の復活なんです。知識は、同じ言

業で語られてしまえばほぼ同じ。しかし、それを身体に落とし込んだときに、みんなが違ってくる。そういう意味でも、まさにこれからの知育や徳育の基盤に、体育があるということです。20世紀までの近代には、一般普遍解というものが存在しました。しかしこれからは、個別暫定解しか存在しないというのが、新しい知のありようです。その知の変容を理解しようとするとき、難しい言葉より、身体知、つまり体育、スポーツが何よりの入り口になります。サッカーを見ても、ゲームの局面が時々刻々と変わり、その瞬間にパスをするかドリブルをするかということは、すべて個別暫定解です。スポーツはすべて個別暫定解の塊であり、それは身体性から由来しているため、そこに個別性のある判断や表現、コミュニケーションが存在する。その点、体育、スポーツは21世紀の潮流の先取りをしているということです。

今、大量生産・大量消費・大量廃棄文明の衰退とともに、大量に存在する人工物の価値が減少し、この世に1つしかないアート、芸術の価値が向上しています。スポーツも、2つと同じ試合はない。そういう意味で、文化社会においてアート性をもつスポーツの価値は上がってきている。そういう流れの中で、私たちはオリンピックを招致してきました。まさに大量生産時代が終焉するのが、2020年の東京オリンピック・パラリンピックだと思えます。そして個別性、多様性をもった一期一会のコミュニケーション、つまり、アート、スポーツが価値の中心に位置づいていく。オリンピックの開会式は完全にアートになっています。スポーツと文化は、今、急接近しています。どこまでがスポーツでどこまでが文化か、境目がわからない。そういうスポーツ文化の時代が来ているということです。その大きな価値のパラダイムシフトが、東京オリンピック・パラリンピックをきっかけとして出てきます。

そこで体育も、旧来の教え込み型から、スポーツ文化型にシフトしなくてはなりません。そのためには、「ただ体育、スポーツを教えているのではなく、体育やスポーツを通じて、主体性、多様性、協働性や思考力・判断力・表現力を磨いているんだ」と、教員がメタ認知的に頭を切りかえる必要があると思えます。言いかえれば、例えば「多様な他者との協働とは何か」を体育やスポーツを通

じて学び、それを他場面でも主体的に応用できるような教育のしかたができてきているのか、ということです。逆に、一挙手一投足をただ指示どおり共同的に動かしているだけでは、主体性がないどころか、子どもたちの思考や判断を停止させています。20世紀型の教え込みは思考停止、判断停止につながり、主体性、多様性の反対に位置します。協働、コラボレーションは、多様な者が集まって1人ではできない新しい価値を生み出すこと。共同、コーポレーションは、同じ者が一緒に同じ作業をすること。この2つの違いを意識してもらえればと思います。

## ■社会への窓口として

そのような中で小学校体育に求めることは、スポーツや体育のもっている意義・意味というものを、まず教員自身が他の教員や保護者、地域の人たちにもっと語れないといけないと思えます。体育という教科で何を培っていくのか、自分が行っていることの位置づけを、ぜひもう一度振り返っていただきたいです。

つまり、教員が、体育を通じていったい何を教えたいのか、なぜ体育を教えているのかということをもっと明確にもっているべきだと思います。前にもふれましたが、例えば「開脚とび」をできるようにする、というだけではなく、その学習を通じて、主体性、多様性、協働性、思考力・判断力・表現力などを培うために体育を教えている、ということ意識することが大切です。

現在、体育について先進的、主体的に学び続けてアクティブに活動している教員と、そこまで意識と理解が及んでいない教員で、二極化しているようにも感じます。2020年には東京オリンピック・パラリンピックもありますが、スポーツにかかわる人たちが、どれだけスポーツのコアバリューを広げ深めるための主体的な活動ができていくか、ということが大切になります。特に小学校では教員の影響が非常に大きいです。いいことも悪いことも、教員をまねてしまう。だからこそ学び続ける教員でなくてはならないし、意欲をもち続け、社会に前向きに向き合い常に成長し続ける教員であってほしいと思えます。小学生の子どもたちにとって、先生、学校は、社会への窓口なのです。(談)



## ① 座談会

## 新しい「資質・能力の3つの柱」をめぐって



筑波大学体育系教授 菊 幸一

早稲田大学  
スポーツ科学学術院教授 友添 秀則(兼・司会)  
東京学芸大学教授 松田 恵示

(五十音順)

## ■新しい「資質・能力の3つの柱」とは

松田 本日はお忙しい中ありがとうございます。今回は現在の学校体育を名実ともに支えていらっしゃるお二人の先生をお迎えして、小学校体育のこれからのあり方などについて様々な角度からお話させていただきたいと考えています。お二人は今、ちょうど討議が進んでいる中教審の教育課程部会「体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループ」のメンバーでもあり、次期の学習指導要領の改訂に向けてかかわっていらっしゃいますので、そのあたりの情報などにもふれていただきながら進めさせていただきたいと思います。

初めに菊先生から、最近の小学校体育をめぐっての動向などについてお気づきのことがあればお願いします。

菊 現行の学習指導要領とそれ以前のものとは、ほとんど「目標」自体は変わっていません。どちらも生涯スポーツを意識した体育を目指してほしいという目標です。ただし、例の学力問題の影響が現行の学習指導要領にはあって、全教科の方向性でいえば「指導と評価の一体化」というように、

かなり指導の具体的な例示を増やしています。このことは、小学校の体育にもずいぶん影響を及ぼしていると推察されますし、実際に耳にもします。今後の小学校体育のあり方が「指導と評価の一体化」あるいは「確かな学力の保障」、そういうものをふまえて、目標と実際の内容との距離感をどのように埋めていくか、そういう視点で今、小学校体育はいろいろ動いていると思います。ただ、それをテクニカルな教授法で解決しようとする、子どもと同じように体育が得意な先生と不得意な先生の差がさらに広がっていくのではないかと危惧しています。

友添 私は現行の学習指導要領をそれまでのものと比べてときに、指導内容を明確にし、具体的な例示を盛り込んだという点はこれまでと違った特色だと思いますし、それは現場の先生方が実際に指導するときに非常にやりやすかったのではと思います。ただし、課題を考えてみたときに、体育で学んだことが子どもたちの遊びや日常生活に十分に反映していないと感じています。今回の学習指導要領は全般的に21世紀型能力論を反映しながら作成されていると思いますが、体育でいう汎

[表1]

【たたき台】資質・能力の三つの柱に沿った、小・中・高を通じて育成すべき 資質・能力の整理イメージ（体育科・保健体育科）Ver.3			平成28年1月20日 体育・保健体育，健康，安全WG 資料2-1
小学校 体育	個別の知識や技能  (何を知っているか， 何ができるか)	思考力・判断力・表現力等 <small>教科等の本質に根ざした見方や考え方等</small> (知っていること・ できることをどう使うか)	学びに向かう力，人間性等 <small>情意，態度等に関わるもの</small> (どのように社会・世界と関わり よりよい人生を送るか)
運動領域	各種の運動が有する特性や魅力 に応じた技能や知識 ・各種の運動を行うための技能 ・各種の運動の行い方について の基本的な知識	自己の能力に適した課題をもち，活動を選 んだり工夫したりする思考力・判断力・表 現力等 ・自己の能力に適した課題に気付く力 ・自己の課題を解決するための活動を選ん だり，自己の行い方を工夫したりする力 ・思考し判断したことを，言葉や動作等で 他者に伝える力	運動の楽しさや喜びを味わい， 明るく楽しい生活を営むための 態度 ・進んで学習活動に取り組む ・約束を守り，公正に行動する ・友達と協力して活動する ・自分の役割を果たそうとする ・安全に気を配る
保健領域	身近な生活における健康・安全 についての基礎的な知識や技能 ・健康な生活，発育・発達，心 の健康，けがの防止，病気の 予防に関する基礎的な知識 ・不安や悩みの対処やけがの手 当に関する基礎的な技能	身近な健康課題に気が付き，健康を保持増進 するための情報を活用し，課題解決する力 ・身近な健康課題に気付く力 ・健康情報を集める力 ・健康課題の解決方法を予想し考える力 ・学んだことを自己の生活に生かす力 ・健康に関する自分の考えを表現する力	健康の大切さを認識し，健康で 楽しく明るい生活を営む態度 ・自己の健康に関心をもつ ・自己の健康の保持増進のため に協力して活動する ・心身の発育・発達などを肯定 的に捉える

用的な能力とは何かといったときに、今学んだことを実際の日常生活にどれほどうまく生かしたかは大事な点になってくると思います。もちろん、社会の状況を抜きにして語ることはできませんが、投能力のデータを見てみると小学校では明らかに低くなっています。投能力が習熟しないというのは、投げるという動作の日常の経験がないということが大きな問題だと思います。握力も、私たちが子どものころは洗濯物を絞るなど、日常生活で握ったりする経験などがありました。今はほとんどない。それから、体力だけではなくて、身体能力、つまり技能も低下しているとみただけがいいと思います。全体的に体力は上向きになりつつありますが、昭和60年頃と比べると体力や身体能力はまだ低下したままです。

もうひとつ、今、教育課程のワーキングの中で議論の真っ最中ですが、小学校の指導内容でいうと、これまで「技能」「思考・判断」「態度」の3つの枠組みでできたものが、「個別の知識や技能」「思考力・判断力・表現力等」、それから「態度」、具体的には「学びに向かう力」だとか「人間性」など、情意的な内容や学習へ取り組む態度、といったように、大きな柱が変わっていく方向にあります(表1参照)。学習論をつくっていくうえで「資質・能力」がこれまでと違う柱になったとき

体育はどう変わっていくのか、あるいは実際の現場にどういう変化をもたらすのかといったことに注目していかなくてはならないと思います。

### ■21世紀型能力から求められるもの

松田 確かに友添先生がご指摘されたように学校体育をめぐる変化はたいへん大きく、「21世紀型の学力，能力」が話題になり、「何ができるのか」といった「使える学力」を学校でしっかりと保障していくという動きが強くなってきています。その中で、体育は指導内容を明確化して底上げを図ってきましたが、運動能力や運動技能の低下ということをとっても、なかなか学校から社会へと転化していかない現状がある。そういうことをふまえたうえで、友添先生のほうから、資質・能力の柱だてを変える議論がされているというお話がありました。この背景についてお聞かせ願えますか。

友添 これは、全教科を通した共通の資質・能力論で構造化できないだろうかという、最初のスタートラインからの位置づけです。この新しい3つの柱をみたとき、小学校の場合にはうまく当てはまってくると思います。ただし、小学校体育では、これまで「知識」はなかったわけですが、実際の運



動もっている特性や魅力に応じた技能だとか、それに伴った知識レベルの問題ということでは、「技能と知識が一体化して何かができるためには、何を知っておかなければならないか」といった知

識・技能の関係でいえば、そんなに大きな問題はないように思います。それから表現力が思考力、判断力とともに設定されたということで、体育でも実際には自分で考えたり判断したりしたことを、言葉や動作で友達に伝えたりする能力、それを表現力という形でおさえていくということです。小学校の場合は、それほど問題はないと思っていますが、中学校・高校レベルになると、例えば技能にかかわらない知識が出てくると、知識も階層があるので、例えばスポーツの価値だとか意義などをどのように「知識・技能」の中に位置づけるかといったような問題も出てくるのではないかと考えています。

菊 おそらくこの中教審から出された枠組みというのは、先ほど述べられた21世紀型能力といわれているものから出てきていると思われる。これまでは、知識中心の知的教科というのがあり、それに対して技能が中心になる体育や美術などの芸術教科、こういった振り分け方をしていたのですが、知識ベースの教科についても、21世紀型能力というのは社会対応型なので、社会が様々に変化する中で単に知識だけをもっていてもあまり役に立たない。これをいかに役に立つものにしていくかという観点に立つと、やはり技能というものが必要になってくる、そういう意味での技能だろうと思うのです。この枠組みが出てきたのは明らかに知的教科からのアプローチだな、と思いました。それをあえて技能教科に適応させていこうとしたら、音楽や美術、体育はちょっと戸惑うのではないかと私は思います。先ほど友添先生から、小学校体育はあまり問題ないということでしたが、小学校体育は教科書がありませんよね。副読本という形でしか技術書はないので、そんな中で小学校の先生方はどのレベルの知識をどんなふうに扱えばよいのか、このフレームの中で現場におろしていったとき、かなり戸惑われるのではないかと

私は少し危惧しています。

友添 確かに菊先生のご懸念もわかります。例えば、知識基盤社会の中では知識がまずは前提としてあり、「できるようになるためには何を知っておかなければならないのか」という意味での知識で、こういう枠組みが生まれてきているのです。ただしそれは技能教科において、特に中学校・高校になれば、なかなかこれをうまく引き取ってくるのは難しいだろうと思っていますが、小学校の場合は先ほどお話ししましたように、うまく授業に浸透していけるのではないかと考えています。というのも、小学校では技能と知識は比較的一体的で、知識ベースで、例えば陸上運動のハードル走で、踏み切ってからどのように自分の体を動かしたらいいのか、つまりバイオメカニクスの知識まで入り込んでいかなくとも、運動のしかたを「知る」と「できる」とは一体的で、小学校段階では、運動のしかたを知って、すぐにできて楽しめるようにしていくことが大切だと思います。言葉をかえれば、楽しさを保障するというのがいちばん大事なことです。つまり、子どもがまたやりたいとかおもしろいとか、こうやったらできたといった、楽しさを保障するための知識であり、技能であり、思考力・判断力であるわけです。だから、そこを丁寧に説明して内容を膨らませていかないと、「知識」だけが独り歩きして、メッセージとしては間違っ理解されてしまう可能性もありますね。

松田 変化の激しいこれからの社会の中では、学力を保障していかなくてはならないということで、全体的には3本の柱だてが枠組みとして出てきました。これは私が参加している学校のあり方をめぐる中教審の議論でもふれているとともに、他の部会等での議論の情報としても伝わってくるのですが、例えば「アクティブ・ラーニング」や「どのように学ぶのか」といった学習者の能動性や主体性を強調する言葉や概念が今、本当に多く出てきています。そういう枠組みが強調され、体育での知識を生きたものにするためには技能と接続しないとダメだという話になったとき、逆に体育などの、技能が学習内容の中核を占めている教科においては、これまでは安定していたのに、逆に内容を矮小化しないように説明する必要があるということですね。



菊 21世紀型能力、いわゆる知的教科から知識基盤社会ということをいわれたときに、体育が内容にしているスポーツは、それがすでにグローバルなものになっていて、言語や宗教を超えたコミュニケーション能力による、文化的な内容をもっているわけです。このことは他の知的教科と比較してのことですが、これまでの知的教科はどちらかというと狭いフレームの中で系統性を考えてきたことから、まだそれは21世紀における社会の中で十分に生かされていないと思うのです。しかし体育はスポーツというものを中心にしてグローバル社会の中でもうすでにパワーを発揮しているわけです。このパワーをどう大事にしていくか、あるいはどう育てていくかが重要だと思いますね。

松田 体育の先導性、先進性、そこを大事にするということですね。とすると、その一方で、これまでの体育では「わかる」と「できる」という問題を扱ってきましたよね。それと今話題の、「知識」と「技能」の問題とは同じなんでしょうか、あるいは違うのでしょうか。

### ■「わかる」と「できる」と「かかわり」と……

菊 基本的に体育は、できるかできないかがすぐわかる教科ですよ。そうしたときに、「わかる」ということは、できていてもわからないこともあるし、わからなくてもできる、わかっていてもできないこともあるわけで、いろんな意味での相互作用があるわけです。ただ教科の性格上、見ればわかってしまうので、評価するには、できる・できないの基準以外もやはり必要だという意味で「わかる」ということは大事なのではないですか。そのときに、「わかる」ということは、知的教科が求めているレベルなのか、どの範囲で「わかる」ということを議論すればよいのか、そこを体育は考えておかなければならないと思います。

友添 ちょっと違う観点からですが、以前に小学校の現場の授業実践に集中的にかかわった時期があって、そのとき、楽しさは教えられるのかという問題に突き当たったことがあります。楽しさを教えるというのが、どうやったら教えられるのかということです。で、今の「わかる」と「できる」の関係で本当に楽しさを保障できるのか、ということを考えてありました。器械運動の授業

でしたが、低学年の女の子がいて、その子は一生懸命に練習をするのですがうまくできない。ところがあるときからだんだんうまくなっていった。どうしてかと、その子の感想文を見てみると、あるときから友達の名前がいっぱい出てきて「○○ちゃんがこう言ってくれた」とか「こんな工夫したらいいよ言ってくれた」とか、友達の名前が出てくるにしたがってうまくなっていった。おそらく、人とかかわりという社会的な関係がつけられたことによって、できるようになっていったのではないかと感じたときがあります。もうひとつは、○○ちゃんに伝える内容というのは、解決方法がわかっていないと伝えられないですよ。伝えることによって上手な子もいっそう上手にできるようになっていく。つまり、「できること」と「わかること」と「かかわり」という3つがうまくいったときに、おそらく楽しいという経験が保障されるのではないかと思ったのです。このことを、資質・能力の3つの柱に照らし合わせてみたとき、まだそれぞれの柱の横のかかわりが弱いと思うのです。知識と技能、そして態度の真ん中に思考力・判断力・表現力を配した形は、実際の実践ベースにしたときにどうかな、と思っているところなんです。

菊 やっぱり知的教科からすると、ある知識を身につけたあと、どう活用するのが21世紀型能力との関係で問われるので、そこに思考力・判断力・表現力を資質・能力として加えないとアクセスできない。だから思考力・判断力・表現力を中核にシフトさせて、そこから知識の問題を逆に考えさせる、そういうようなところではないでしょうか。体育の場合はむしろ、技能教科として成り立ってきているので、技術・技能が問われますが、実際にできたらそれでいいのかということです。要は、自分はどのようにできたのか、戻る、振り返るわけです。先ほどの友添先生の話でいえば、できない友達に伝えてあげたい、教えてあげたいといったかかわりの中で活動が活発になっていく。そのことが結局は学びに向かう力とか人間性の向上につながっていく。ですから、これは今まで





体育の授業の中で培ってきたことであって、そんなに難しい問題ではないとも思っているのです。友添 そこからスタートしていくと、逆に心配するのは、枠組みは変わったが、実際の授業は変わ

らないという現象が起こってくる可能性があることです。資質・能力に応じて、知識・技能をセットにして、思考力・判断力・表現力、それから態度が位置づけられ、指導内容の枠組みが変わっていく。今までのフレームは技能と思考・判断と態度で、明らかに柱だては違うとしているのだけれど、実際は目標も同じ、領域や素材とする教材も同じで、ということだと、落としどころというか、最後のゴールのイメージがつかめないように思います。

菊 前の学習指導要領から今回の学習指導要領にかけては、武道の必修化だとか指導と評価の一体化などや発育発達段階に応じた例示を示しましたね。もちろんいろんな意見があると思いますが、ある種の特徴があったと思うのです。ところが今回は、改訂に向けてなかなか特徴を見いだせない、目玉が見当たらないのですね。現行の学習指導要領については、もう一度「指導と評価の一体化」ということに関してどのように指導しているのか、そういったことが反省として出てくるのかどうか、その問題はきちんと議論しなければいけない。そのうえで、今求められている3つの資質・能力というのは長い歴史の関係からいうとどのように位置づけられるのか、体育から見たときはどうなのかなど、しっかりとおさえておかななくてはならないと思います。

友添 ちょっと学習指導要領と離れますが、小学校体育の成果はどこで現れてくるかといったときに、中学生に大きく影響してくるのですね。中学校2年生のデータを見てみると、女の子ですが、5人に1人は1週間の運動時間が90分未満、つまりほとんど運動していないという突出した層がある。それを見たときに中学校の体育のせいであんなったのか、小学校の体育のせいなのかといったときに、おそらく運動とかスポーツに対して積極的にやってみたいという子どもたちが少ないので

しょうね。小学校の体育の教材構成論というのを簡単にいうと、低学年は運動遊び、中学年からはスポーツを素材とした運動の教育ですね。つまり、遊びから運動へ、そして中学校からはスポーツへ。しかし中学校でそれがうまく生きていない部分がある。何が欠けているのかというと、日常生活の中に転用していく汎用性、機会があれば動いてみたいとか、放課後に学校に残って運動してみたいとかいったことがあんまり見られない。ですから、その原因は何か、何をどう変えればよいのかということを経年の改訂に合わせてもう一度見直してみるべきではないかと思っています。また、厳しい言い方ですが、実際の授業の中で本当に楽しさが保障されているか、これももう一度見直したほうがいいのではないかと思いますね。

松田 最初の話に戻りますが、そうしますと、今回の3つの柱で示されようとする新しい体育では、小学校体育に焦点を絞ったとき、例えばこういう動きやこういったことが出てくるのではないかと、といった予想がありましたらお話ししたいのですが。

### ■これからの小学校体育の新しい動きは？

友添 今回の議論の特徴のひとつは保健との融合ということです。これまで保健と体育は、同じ教科でありながら、改訂作業は別々でやるが多かったのですが、今回、保健と体育をスポーツ庁の中の学校体育室というところで一括して行うようになりました。それで、体育は保健と限りなく融合していく方向で、例えば運動と健康、安全をトータルに見ていこうということです。子どもの心身にわたる発育や発達を見据えたとき、どのような運動素材がいいのか、あるいは楽しさを保障するためには、教材や人との交流とどういふかかわり方があり、そのかかわりを子どもの健康やメンタルな面からも考えてみようということだと思います。

菊 これまでの小学校体育と地域とのつながりは、地域を中心とした第1次産業中心の社会から、だんだん都市化してかかわりが薄くなり、さらに高齢者社会になっていくと、いろいろな世代がまた学び直すということになると予測されています。その拠点がどこかということ、日本は学校というも

のをきちんとつくってきましたから、まさに学びの場所としての機能、いわばコミュニティスクールとして期待されるということがひとつあると思います。それから小学校体育の3つの資質・能力との関連でいうと、地域が窓口になって学びに向かう力を学校のほうに寄せていく。健康やスポーツの面でいえば、地域の中にスポーツや運動をする施設や場を求めるとすれば、体育館や運動場の施設を有する学校という場があるわけで、形式的な学校開放ではなくて、まさによりよい生活を送るために、地域と子どもたちをセット・総合する場としていくこともできるのではないかと思います。この3つの資質・能力は体育やスポーツの関係でいうものすごくアクセスする窓口が広いのではないかと、そんな感じもしています。

友添 なかなかいい答えが出ないのですが、学びに向かう力と人間性というところから考えていくと、例えば「障壁を低くする体育」だと思うのですね。障壁とは何かというと、学びの壁をどんどん下げていくことで、地域や社会と、あるいは障害をもった方や異年齢の人たちとどうかかわっていくかということで、言葉をかえれば、「共生」や「多様性」という言葉がキーワードだと思うのです。先ほども言いましたが、障害のある子や特別な配慮をしなければならない子どもたちとどうかかわっていくのかということに、逆にいうとその障壁をどう下げていくのか、それから外国から来た子どもたち、あるいは定住外国人の子どもたちとどのように運動やスポーツを通してよい関係をつくっていくのか。そのときに例えば個別の運動の中での知識や技能、思考力や判断力、表現力が、人間性などとかかわって運動の力として結実していくような授業が必要になってくるし、現実的にそういう時代に私たちは生きているということ。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを前にした今こそ、開かれた学校とか開かれた体育ということを実現していくべきときで、今回の学習指導要領のイメージはそこにあります。

松田 「チーム学校」の議論など、学校全体が社会との連携・協働を基盤にした場へと変わろうとしていますし、教育課程自体も「社会に開かれた」という言葉がキーワードですからね。

最後に今後さらに「健康、安全ワーキンググル

ープ」も進むことと思いますが、どういう出口、落としどころとなりそうか、少しお考えを聞かせていただけますか。

菊 最初に申し上げたことの繰り返しになるかもしれませんが、こういう資質・能力論を受け止める体育の構えというかフレームというのが、今までに蓄積してきたフレームとどこが違うのかの冷静な判断が必要だと思います。現場の先生方にとっては具体的にどう違うのか、当然そういう問いが出てくると思いますが、その問いに、同じように見えてもこの角度から見るとこのように評価できる、といったようなメッセージを発信していかないといけないのではないかと思いますね。今ワーキンググループに現場の先生もいらっしゃるのですが、現場で今何に困っているのか、生の声をしっかりと出してもらうことと同時に、我々研究者や学校にかかわりをもつ部外者の人たちが同時にメッセージを発信して、よりよいフレームをつくっていく、そういうことが重要だと思います。

友添 私も先ほどから申し上げているように、学校や体育の障壁を下げていくようにしていく必要があるし、多様性を認めていけるような資質・能力を、究極的には運動やスポーツを学ぶことで、体育の手段論とか目的論とかの議論を超えて身につけていくことが大切だと考えます。体育の学習で自分と他者との関係を新しくつくりあげていく、そのことが楽しさを味わって自分自身を成長させてくれるような体育をイメージしています。

菊 ちょっと付け加えさせてもらおうと、新たな秩序形成にとって、多様性というのは決して並列関係ではないと思うのです。多様性を認めるグローバル社会において求められている、新たな秩序づくりのまさに原点になるところで、体育はその核になる非常に重要な学びの場だと思っています。だからこそスポーツがグローバル社会の中でも、現実にこれだけ受け入れられているのでしょうね。その現象をきちっと評価すべきだし、学校体育の中でミニマムとしてきちんと子どもたちに伝えていかなければならない学習内容だと思っています。

松田 今日はお忙しいところをありがとうございました。小学校体育が抱えている問題やその背景などについてお話いただき、とても楽しい時間でした。 ■

・この座談会は平成28年3月3日に行われました。

《1》

リズムダンス審査員として思うこと

公益財団法人 日本オペラ振興会理事長 佐竹 康峰



昨年末に『全国小・中学校リズムダンスふれあいコンクール』の審査員を務めさせていただいた。リズムダンスが学習指導要領の体育科に採用されたのを機に、先生方の指導の一助、また子どもたちに楽しさを伝えられればとの願いから、2013年に内閣府・文部科学省後援のもと、TBS・毎日新聞社・スポーツ日本新聞社等が主催者となり、昨年で3回目を数えた。全国都道府県の地区予選を勝ち上がった小・中学生が、毎年12月26日、27日の両日、赤坂BLITZで決勝戦を繰り広げる。小・中学校それぞれが自由曲と規定曲とに分かれ、計4部門ごとに勝敗を決する。

私は、本プロジェクトに共感を覚える。評価ポイントが「上手に踊ればよい」だけでなく、「笑顔はあるか」「チームワークは」「あいさつやマナーは」など、ダンス技術よりも人格形成や学級のまとまり具合のほうにより大きな焦点が当てられているからだ。4年前に企画の趣旨を伺ったとき、本当にうまく評価できるかと心配した。実際に審査員席に座ってみてどうだろう。確かに、身体の大きい子小さい子、女子と男子、運動神経のよい子悪い子、3人のチームと30人のチーム……、実に様々な組み合わせや可能性が1つの学級に集まっている。それを担当の先生が個と集合の妙をいかに表現し、ひいては学級運営にどう腐心されているか、審査員の関心はほぼ同じベクトルを向くから不思議だ。例えば、身体能力が高いA君と後ろでモタつくB君がいて、B君がお荷物扱いされているなら、A君のパフォーマンスがいかに優れていても感激は薄い。もしB君のことがよく認識されていて、あえて皆との差を表に出しつつも、キャラクターを生かす演技や皆がサポートする振り付けがなされていたなら、会場は歓声に沸こう。

一方、参加者が子どもだからこそ、勝ち負けにこだわるのも無理はない。順位発表の際、準優勝チームは落胆する。司会のアナウンサーからのインタビューに「1位になれなくてクヤシイ〜!」と

泣き崩れる子らを見て、複雑な気持ちになる。審査員各氏の公正な評点を経ても、1、2位は(3位も)僅差であることが多く、子どもたちにすればその差が一体どこにあるのか瞬時にはわからなくて当然だろう。悔しいと感じたこの日、大人への階段の第一歩を記したことにしてほしい。後で先生や仲間たちと、「でも2位になれた。今度1位になるには!」と、ゆっくり話し合ってみてはどうだろう。できれば感想文にしておく、将来の記念碑になるに違いない。

さて、順序が後になったが、私は現在オペラ団体のボランティアをしている。本職は40年来金融マン一筋なので、あくまでも団の経営が役割だが、今に導かれた背景には50年前の小学4年生のときの原体験がある。書いた作文が名古屋市(確か?)から賞をいただき、副賞でCBC(中部日本放送)の『ママとえんぴつ』という番組で朗読することになった。あわせてリクエスト曲をきかれ、母の好きな『浜辺の歌』か、わんぱくな自分を皮肉って『叱られて』にするか迷い、後者を提出した。

当日、私の朗読が終わるや、アナウンサーのお姉さんの合図で、スタジオのドアから青いドレスの女性歌手が突然入ってきた。そして、なんと目の前で『叱られて』を歌ってくれたのだ。興奮と緊張冷めやらず、もぬけの殻の私の心に生歌が入り込み、感動が支配した。こうして私は10歳のときに音楽の力と凄さを知った。アナウンサーのお姉さんから感想をきかれ、驚がくのあまり声を失ってしまったことは、いまだに冷や汗ものだ。学校の教室でラジオ放送を聴いていた級友たちも、我が狼狽の様子を想像して爆笑したらしい。雰囲気は電波に乗ってしっかり伝わっていた。

スポーツも音楽も、勝ち負けを超えて人をウキウキさせる。個性と共生の葛藤の間を揺れ動きながら、人を愛する優しさを育む。できるだけ早い時期から、体験を通じて心に浸み込ませることが大切だと思う。(さたけ・やすみね)

《2》

幼児期の“遊び”が小学校体育を変える

東京学芸大学教授 吉田 伊津美

幼児を対象とした興味深い研究があります。運動能力の低下は幼児期から始まる問題ですが、体操やサッカー・水泳など早期から運動指導に力を入れる園も少なくありません。こうした運動指導の有無で幼児の運動能力を比較したところ、運動指導をまったくしていない園の方が運動指導をしている園よりも幼児の運動能力が高かったのです。

一見矛盾しているこの結果は、運動の行い方に問題があると考えられています。指導者を中心に特別な運動指導をする園では、整列や説明などに時間を要し、結果的に子どもの身体活動が制限されます。これに対し特別な運動指導をしない園では子どもの自発的な「遊び」が中心で、その中で存分に体を動かす機会が保障されているのです。

実は、遊びとして運動を行う園ほど、多様な動きを経験していることも明らかにされています。すなわちこれらの研究成果は、遊びとしての運動が、運動発達に貢献していることを示しています。

小学校の体育では、運動領域で幼児教育との円滑な接続を図ることや生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を培うことが示されていますが、幼児期から低学年に観察される動きを見ると、小学1年生の動きの種類が極端に少なくなっていました。前述のような問題もありますが、1年生の体育も幼児期の活動や経験をふまえた内容になっていない可能性があるのかもしれませんが。

人は、楽しいことはまたやりたくなりますが、つらいことをまたやろうとは思わないでしょう。運動遊びは、体力を高めるなどの手段としてではなく、体を動かすこと自体が楽しいと思える遊びであることが必要です。前述のとおり、幼児期の運動遊びでは、指導者に統制された活動よりも、自由な遊びの方が多様な動きを経験しています。同じ活動の繰り返しや技能の反復練習は、結果的に動きの経験が偏り、不器用な子どもをつくります。また、動きのレパートリーだけでなくバリエーションも少なくなります。遊びとして行うことは、多

様な動きの経験という運動面だけでなく、子どもの意欲や有能感を育てることとも関係しています。

また、遊びとしての運動における指導では、個々の子どものやり方を尊重することが大切です。子どもの能力は様々です。遊びでは課題は一律である必要はなく、その子なりのやり方を尊重することが他者への気づきや他者を認める姿勢につながります。自己課題への取り組みは自己決定することでもあります。運動発達は運動経験によるため、楽しく繰り返し活動することで結果的にできることが増えていきます。

一方、多様な動きの経験を考えるとき、経験の少ない動き、経験させたい動きから環境を考えることも効果的です。動きを指示するのではなく、その動きが引き出される環境をつくることで、自ずとその動きを経験させることができます。環境(場)には動きを引き出すという性質があります。ひもを張ったところを通るときも高さによってはまたいだり跳び越したりするし、下をくぐっていくでしょう。マットがあれば寝転がったり、リボンを手にはすれば振り回したり、走ったりするかもしれません。指示しなくてもついやりたくってしまう環境や教材を工夫することが、子どもが主体的に取り組む姿勢を育むことにもなります。

学習指導要領には、「低学年は“運動遊び”として示しているが、これは児童が易しい運動に出会い、伸び伸びと体を動かす楽しさや心地よさを味わう遊びであることを強調したもの」と説明されています。運動遊びは、単純ゆえに楽しいことも多く、それを繰り返す中で動きが洗練され、工夫したり試したり、新たなものをつくり出したりする経験にもなります。「幼稚園はただ遊んでいるだけ」と思われる方も多いと思いますが、遊びを低次なものと捉えるのではなく、その意義をあらためて捉えなおすことで、少なくとも体育においては幼小の円滑な接続が図られることになるのではないかと思います。(よしだ・いづみ)

## 「うごいて かかわる」

# オリンピック・パラリンピック教育

—オリンピックの3つの価値と4つのアクション, 5つのテーマを組み合わせて—

葛飾しらゆり学園幼稚園 園長  
前東京都葛飾区小中一貫教育校 高砂けやき学園 葛飾区立高砂小学校 学園長 木室 忠明

### はじめに

東京都教育委員会は、2020東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催に向けて平成28年度からすべての公立学校で「オリンピック・パラリンピック教育」を推進する。これに先立ち、平成26年度に推進校を指定し（この中から平成28年度に研究開発校を指定する）先行実践を進めてきた。

本校がこの取り組みにかかわった経緯は、平成25年のオリンピック招致以前にさかのぼる。平成19年度に環境都市・東京の象徴として校庭の芝生化、平成21年度にスポーツ教育推進校、平成23年度に東京都小学校体育研究会研究発表校、平成25年度に東京都体力向上プロジェクト・コーディネーショントレーニング実験校と、長い期間、体育科学習を通して東京都教育委員会スポーツ教育施策にかかわってきた経緯がある。また、平成24年度からは小中一貫教育校として、9年間の教育としての人間形成を目指す学園目標「未来を切り拓く生きる力を身に付け 自立できる子」を設定して教育活動を展開してきた。(表1 参照)

### ■本物体験を重視した教育活動

児童の学びの根幹を「本物体験(感動)の重視」と設定して学校経営方針を立てている。

その効果はすぐに現れた。パラリンピック・アスリート成田真由美氏を招聘し、プールで子どもたちと泳いでいただいた。それを目にした驚きは、課題の多かった高学年児童、特に不活発で人間関係に課題を示していた高学年の生活習慣や学習意欲に大きな変化をもたらした。温度感覚や身体維持機能にハンデをもつ女性が記録の向上やメダルを目指して世界に挑戦していく姿は子どもたちに大きな衝撃を与えた。その後続く、スポーツ関連以外の様々なジャンルの「本物」に接することは子どもたちの心を揺さぶり続けることとなる。(詳しくは本校ホームページ参照)

### ■研究の深まり

オリ・パラ教育のガイダンスは昨年度から校長が行った。それは、私自身が1964年の東京オリンピック開催時、6年生であったからだ。10月10日の開会式の青空に描かれたブルーインパルス5つの輪は世界と日本がつながっていることを実感し、自身の巣立ちの方向を定めてくれた。

長野冬季五輪からも20年がたち、教員の多くはオリンピックを身近に感じていない。研修を始めるには、「クーベルタン男爵の願い」や「五輪旗」「古代オリンピック」から話を始めなければならず、我が国のスポーツ文化の基礎である嘉納治五郎に行きつけるかも見通せないスタートであった。

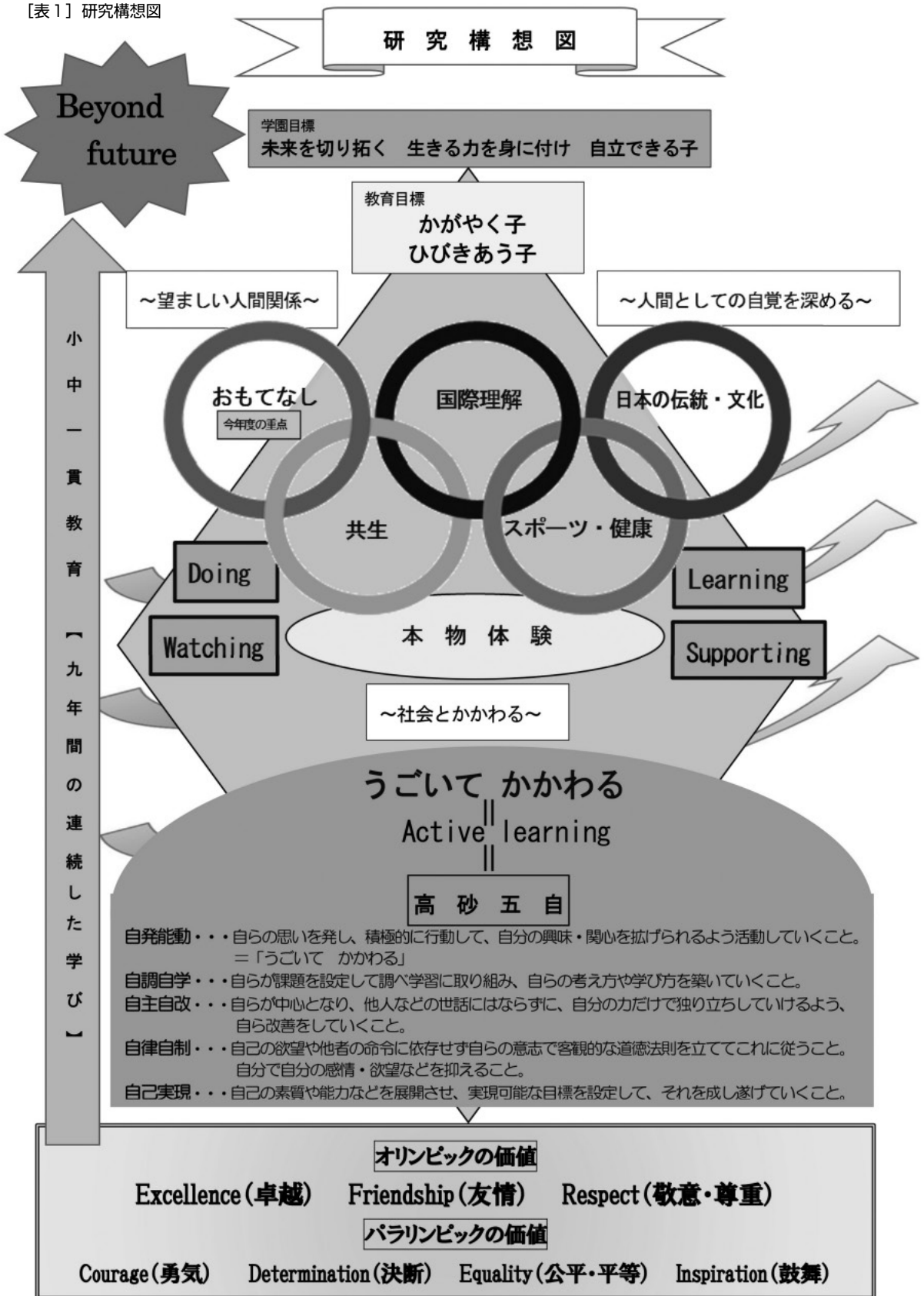
しかし、この過程をふむことが重要であったことが後に判明する。それはオリ・パラ教育と関連させた「道徳授業公開講座」に向け、全校で『オ(パラ)リンピアンに学ぶ』や『スポーツに学ぶ』というテーマで教材を探し、授業を組み立てる作業を全教員で行う中で、オリンピックの精神や価値、歴史、遺産を扱うことが、他の教科や領域で学ぶ内容となんら相違のないものであることに教員自らが納得しはじめることになったからだ。

また、区内の体育科研究会や管理職への話題提供の場面でも、競技種目やパラリンピックの参加要件、スペシャルオリンピックの存在を伝えるのにも丁寧さが要求された。

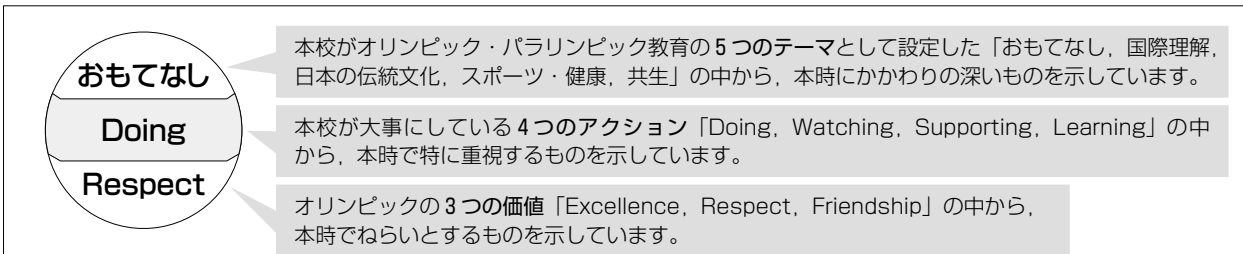
### ■関連づけて学習活動を展開する

オリンピック・レガシーという言葉に集約されているが、1964年に残されたものは、新幹線や高速道路のように「目に見えるもの」として受け継がれている。もちろん、大松博文の女子バレーボールは“ママさんバレーボール”を急成長させたし、国立霞ヶ丘競技場はナショナルスタジアムとしての使命を全うした。それでは2020年のオリンピックでは何を後世に残していくのかは、明確で

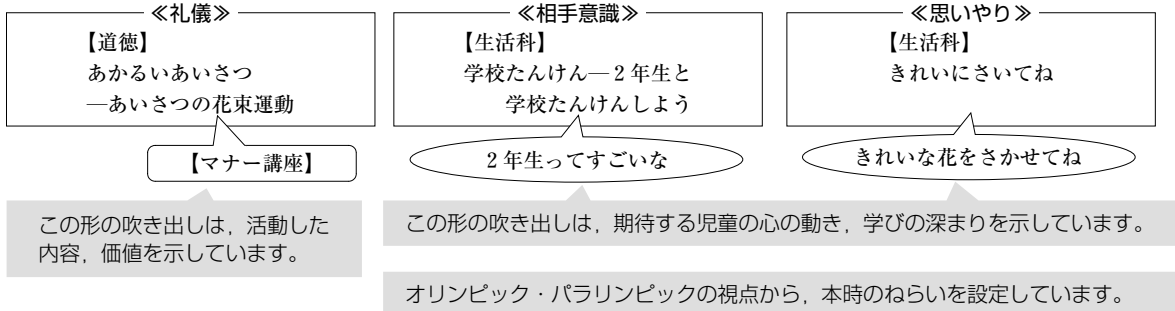
[表1] 研究構想図



[表2] 学習指導案に盛り込まれたオリンピック・パラリンピック教育の視点 (例)



■1年生の「おもてなしの心」の育成 (1学期)



- (1) ねらい……新しい1年生に喜んでもらえるように、交流会でどんなことをすればよいか考える。
- (2) 本時の展開

学習活動	★期待する児童の心の動き、学びの深まり	○…支援 ◆…評価
<p>2. 学習でどんなことを教えてあげたいか、何を一緒にしたいかを話し合い、遊び・学校案内・お知らせに分けてワークシートに書く。</p> <p>オリンピック・パラリンピック教育を意識して、特に意図的に行う教師の発問や声かけを、吹き出しと☆印で表しています。</p>	<p>☆新しい1年生を高砂小学校に招待して交流会をします。どうしたら喜んでもらえるか、みんなで考えましょう。</p> <p>★どんな遊びが好きなのかな。 ★けがをしないように気をつけてあげよう。 ★ランドセルを背負わせてあげたいな。</p> <p>オリンピック・パラリンピック教育の視点から、求める児童の反応について★印で表しています。</p>	<p>○1年前の学校案内の写真を黒板に掲示。 ◆「どうしたら喜んでもらえるか」について考え、話し合いに参加している。(Respect 思考・判断)</p> <p>オリンピック・パラリンピック教育として本時で重点をおく評価の観点を◆印で表し、オリンピックの3つの価値のどの視点で見えるかも示しています。</p>

ありそうでいながら、様々な進行計画のミスも相まって不透明さが漂っているといえるだろう。

当初示された「するDoing」「みるWatching」「ささえるSupporting」というAction行動指標を通して、今回のオリンピックの中で何を「遺産」としていくかは重要な課題である。加えて、招致決定でセンセーショナルなキーワードとなった「おもてなし」は、論点をより現代の日本社会の文化・経済からの課題解決の方策のみのように思われる。すべての子どもがオリンピックになれるはずはなく、目指すことはない。しかし、東京にオリ・パラを迎えるという直接体験の機会をどのように活用していくかを考えるのは、教育界の重要な使命である。そこに「まなぶLearning」という指標が加わったことは当然の経緯である。

この実現のためには、教師がすべての教育活動に文明の宝である「オリビズム」を念念として価値づける意識が重要である(表2参照)。例えば、時間や距離を競う種目の理解には「算数・数学」や「物理」「幾何学」の世界を通して【Respect敬意】と【Excellence卓越】を味わうことができる。アンチドーピングの考えは「保健」でも「道徳」「化学」でも扱える【公平】の概念形成である。

■年間指導計画の作成

平成27年度からは3つの価値 (Excellence Respect Friendship) と4つのAction (行動指標 Doing Watching Supporting Learning) に現代の教育課題 (テーマ: 「おもてなし」「国際理解」

[表3] 平成27年度 オリンピック・パラリンピック教育 年間指導計画 (第6学年)

月	教科・領域	単元名	総時数	オリンピック教育 時数					取扱時数
				5つのテーマ					
				おもてなし	国際理解	伝統文化	スポーツ・健康	共生	
4	学	☆オリエンテーション	1/3	1/3					1/3
	総	お客様のことを調べて下級生に伝えよう 心を込めてお迎えしよう	5	1	1				2
5	総	日光プロジェクト	15			4			4
	道	礼儀「エレベーターとわたし」	1	1					1
6	国	日本語のひびきを味わおう	4			1			1
	国	狂言教室	4			2			2
7	体	保健「病気の予防」	2				1		1
9	外	日光プロジェクト	4	1	1				2
	外	友達を旅行にさそおう	4		2				2
10	体	陸上運動「短距離走・リレー」	14				1		1
11	学	高砂わいわいまつり	3				1		1
12	社	平和で豊かな暮らしをめざして	8		1				1
1	外	道案内をしよう	4		1				1
	国	伊能忠敬	11			1			1
	道	規則の尊重・権利・義務「考えよう、これからの社会と私たち」	1					1	1
	道	公正・公平・正義「どれい解放の父、リンカーン」	1		1				1
	道	国際理解・親善「世界がもし100人の村だったら」	1		1				1
	総	ディスカバーJAPAN	15		1	4			5
2	社	日本とつながりの深い国々	8		2				2
	道	国際理解・親善「ホワイトハウスにできた柔道場」	1		1				1
3	体	保健「病気の予防」	2				1		1
	社	世界の人々とともに生きる	10		1				1
	道	向上心・個性伸長「人間はすばらしい」	1			1			1
	学	☆1年間のふりかえり	2/3	2/3					2/3
オリンピック・パラリンピック教育 合計				4※	13	13	4	1	35

活動の重点④

Excellence Respect Friendship

○5つのテーマと4つのアクションを組み合わせることで多様な取り組みを進めていきます。  
※オリエンテーション、1年間のふりかえりの時数を便宜的にここに含んでいます。

「日本の伝統文化」「スポーツ・健康」「共生」を組み合わせ、全学年の教育課程を再構築する作業に取り組んだ(表3参照)。

至難に思えたこの作業は、オリ・パラ教育以前のスポーツ教育推進校での蓄積の成果が重なり、思いのほか作業速度を高めることができた。本校では、年度当初オリエンテーションと年度末に振り返りの時間を設定した。これは課題設定と取り組みへの自己評価を明確にすることで、研究の中心標語である「Beyond Future」を明確にして、2020オリ・パラ以降のレガシー形成を示している。

また、試作として組まれた各学年35時間のカリキュラムはその学年の実態や教師のエネルギーをかけやすい内容に応じて修正していけるものである。ぜひとも参考資料として一読をいただき、狭

義な知識理解としてだけでなく、能動的な学習プログラムとして変容させ、さらに活用していただきたい。

### ■スポーツ文化の定着、豊かなスポーツライフへ

オリ・パラ教育は、競技理解でもスポーツ鑑賞でも健康維持・体力向上策でもない。ましてや体育科教育に限定されているものでもない。言いかえれば地球人として生きる共通言語の形成と考えるべきであろう。

それでも、「体育人」<過去から現在・未来を運動・体育にかかわり活きている者>としては、大会開催期間中の競技の“熱狂”がなくては「その先の未来に続かない」ことだけは明確にしておきたい。

(きむろ・ただあき)



「デジ体」を  
使った授業

児童が「わかった」「できた」  
という実感をもてる授業を目指して

宮城県仙台市立錦ヶ丘小学校教諭 小寺 正洋

はじめに

錦ヶ丘小学校は、平成27年4月に開校し、仙台市内127番目の新設校である。開校当初の児童数は960名であり、市内トップクラスの大規模校としてスタートした。

また、本校は仙台市教育委員会教育指導課から「タブレット端末を活用した授業及び学習環境の研究事業」の研究校として指定を受け、授業実践を積み重ねてきた。本研究事業は、ICTの効果的な活用について知見を有する大学と共同し、学校における実践的な研究を通して、「授業におけるタブレット端末の効果的な活用方法」、「ICT活用指導力の向上を目指した教員研修のあり方」、「タブレット端末を安定的、効果的に活用するための学習環境のあり方」の3つについて仙台市としての見通しをもつことを目的としている。

本校には、全40台のタブレット端末が常備されており、体育の授業に限らず、様々な教科・領域において、学習のねらいに合わせてタブレット端末の活用を図り、学習効果を高めている。今回は、2年生の「マットを使った運動遊び」におけるタブレット端末の活用の実践について紹介したい。

1. 授業の構想

(1) 児童の実態から

男子児童15人、女子児童18人、計33人の学級である。事前に行った意識調査と実態把握から、いろいろな方向へ転がり、手で支えての体の保持や回転を楽しく行うことができたが、今回の授業実践（タブレット端末使用）にあたっての子どもたちへの事前の意識調査から以下のような課題が残っていたことがわかった。

- ・前転がりや後ろ転がりに対して、「苦手」と感じている児童が多い。
- ・前転がりや後ろ転がりの動き方が、「わから

ない」と感じている児童が多い。

- ・前転がりや後ろ転がりが「できる」と感じていても、実際の技能が伴わない児童がいる。

そこで、①理想とする前転がり（前転）、後ろ転がり（後転）を見せ、その動きを共有することで目標を明確にする。②どこに気をつけたらいいか、動き方を知るための手立てとする。③ポイントを理解したうえで、前転がりや後ろ転がりを経験させることで、成功体験を多く積ませる、という3つのねらいをもって「デジ体」（光文書院版『デジタル体育』）を活用することとした。「前転」や「後転」を学ぶうえで必要となる、背中を丸める動きや両手で支える動きなどの基礎技能を習得させ、前転がりや後ろ転がりに対する抵抗感を減らし、3年生に向けてつながりのある授業をつくりたいと考えた。

(2) 本校の状況からの指導の手立て

本校では、前述のとおり、タブレット端末を使用する環境が整っている。これを生かし、今回は「デジ体」のストアアプリ版をタブレット端末にダウンロードし、使用することとした。

授業のねらいを達成するために、従来の年間指導計画（表1）の2～4時の展開を修正した（表2）。そして、各単位時間の学習のねらいに応じて、「デジ体」の有効的な活用法を考えた。

①自分たちの課題に気づかせる教材の工夫

単元の導入では、「自分たちの動きを知ること」をねらいとして、ストアアプリ版「デジ体」の撮影・保存機能を利用し、児童が前転がりや後ろ転がりをする様子を撮影し、客観的に自分たちの動きを分析するための教材として利用した。

- ・撮影の際には「デジ体」に収録されている「正しい動き」の模範映像と同じアングルから撮影した。

【表1】 単元計画「2年・マットを使った運動遊び」

時	0～10分	10～40分	40～45分	評価		
				関	思	技
1	準備運動 学習課題の確認 準備 発表会	オリエンテーションと補助的な運動	振り返り 整理運動 片づけ	○		
2		ゆりかご				○
3		前転がり			○	
4		後ろ転がり				
5		丸太転がり				
6		背支持倒立				○
7		かえるの足打ち				○
8		壁のぼりさか立ち 支持での川とび				
		発表会			○	



【写真1】 タブレット端末で動きを確認



【写真2】 練習。自然とポージング



【写真3】 学んだ解決（練習）法でできた！

【表2】 単元計画「2年・マットを使った運動遊び」 修正版

時	0～10分	10～40分	40～45分	評価		
				関	思	技
2	準備運動 学習課題の確認 準備	自分たちの動きを知ろう ・前転がり ・後ろ転がり ・支持での川とび 📱「デジ体」撮影・保存	振り返り 整理運動 片づけ	○	○	
3		気持ちよく前転がりをしよう ・前転がり…→前転へ 📱「デジ体」つまずき解決法			○	○
4		気持ちよく後ろ転がりをしよう ・後ろ転がり→後転へ 📱「デジ体」つまずき解決法				○

・撮影後、撮った映像を児童に見せ、①誰の、どんなところがうまいか。②どこに気をつけると、よい動きになるのか、を考えさせた。  
・最後に「デジ体」収録の「正しい動き」の模範映像を児童に見せ（写真1）、動きのポイントと自分たちの課題についてまとめた。  
また、映像だけでなく、抽出児童による試技や教師の模範試技を組み合わせながら指導することで、課題がより明確になるようにした。

②「わかった」を実感させる学習過程の工夫

第2時と第3時の学習では、以下のような学習過程を考えて、実践した。

- ①学習課題（めあて）の確認
- ②「正しい動き」と「つまずき例」の比較
- ③解決法（練習方法）の確認
- ④練習
- ⑤課題（前転がり・後ろ転がり）の試技

②を行うことで、前時に確認した自分たちの課題を想起させるとともに、どのポイントに気をつければいいのかを明確にすることをねらった。また、③で課題解決の手立てをはっきりと示すことで、児童自身が練習の目的とゴールを理解できるよう

にした。自身の課題と動きのポイント、解決法とゴールを「わかった」と実感させることで、後述する「できた」の実感にもつながると考えた。

「デジ体」は、②と③の場面で活用した。さらに、④や⑤の間も、固定カメラのような形で撮影させておき、個別指導を行う際にも、タブレットを活用した。

③「できた」を実感させる振り返りの工夫

第2時と第3時の最後には、映像を見ながら技能の高まりや動きの変容を振り返る時間を設定した。

- ・第1時の試技（指導前）の映像と、第2・3時の練習後に行った試技（指導後）の映像とを比較させた。
- ・映像を見る観点として、①理想とする前転がりができている人は何人いるか。②1人ひとりの動きはどんなところがよくなっているか、の2点を与え、動きの変化について客観的に振り返ることができるようにした。
- ・本単元の学習を通して、授業以外の時間もタブレットを使用し、保存した動画を見ることのできる環境を整えて、個々の動きの変容を

見取ることができるようにした。

児童の実態からわかった児童の実感と技能の不一致を防ぐとともに、客観的に試技を振り返ることで、細かな動きの変化にもスポットを当てて、各自の成長を実感させたいと考えた。

## 2. 授業の様子と児童の変容

### (1)第2時「自分たちの動きを知ろう」

児童は、自分たちが前転がりや後ろ転がりをする映像を見て、以下のようなことに気づくことができた。

<前転がりについて>

- ・Nさんの前転がりが速くてうまい。
- ・体を丸めて転がるとよい。
- ・おへそを見ながら回るとよい。
- ・頭の後ろのほうをマットにつけるとよい。
- ・スピードがなくて起き上がれないのが課題。  
(横に手を着いて起き上がっている)

<後ろ転がりについて>

- ・Y君の後ろ転がりがきれい。
- ・手は耳の横につけるとよい。
- ・坂道マットだと転がることができているが、平らなマットでは、寝転がっているだけ。
- ・体を丸めていなくて、手でマットを押すことができていないのが課題。

### (2)第3時「気持ちよく前転がりをしよう」

「正しい動き」と「つまずき例」の比較をさせたことにより、児童はスピードをつけて起き上がることの大切さに気づいた。そして、「デジ体」で紹介されている課題の解決法から「体の倒し方の練習(ゆりかご→背支持倒立)」と「腕の振り方の練習(ゆりかご→立ち上がる)」を選択し、練習を行った。練習を繰り返すうちに、振り上げた足を前に倒しながら転がることができる児童が増え、スピーディーに起き上がる姿が見られるようになった。また、特に指導したわけでもないのに、起き上がった直後に両手をY字に開き、ポーズする児童の姿が多く見られた(写真2)。動画の効果の1つといえるであろう。

第2時の試技では、転がった後に体育座りのような姿勢になり、横に手を着いて起き上がる児童がほとんどで、横に手を着かずにできた児童は29名中5名(17.2%)であったが、第2時の終末の試技では、30名中21名(65.6%)が回転の力を利用し

て起き上がることができるようになった(写真3)。

### (3)第4時「気持ちよく後ろ転がりをしよう」

気持ちよく後ろ転がりをするためには、体を丸めることと手をしっかり着いてマットを押すことだと気づいた児童たちだったが、ここで問題が起きた。溝をつくったマットで手のひらをマットに着ける練習を選択したのだが、マットの数が足りなかったために、思うような練習ができなかったのだ。そこで、児童たちは第2時で行った「体の倒し方の練習(ゆりかご→背支持倒立)」の動きと手のひらをマットに着ける動きを組み合わせるという練習を独自に編み出し、練習に取り組んだ。さらに、「足を頭越しさせて、マットに着けるようにするとよい」という意見が児童から出され、自然と後転の動きに近づくような流れとなった。動画を繰り返し見ることによって、目指すべきゴールの姿が明確になり、自分たちの課題と、どこを練習すればよいかというポイントが理解できるようになったからこそ生まれたアイデアであったと考える。

第2時ではただ寝転がって終わる児童がほとんどで、できた児童は29名中3名(10.3%)であったが、第4時の終末の試技では、平坦なマットでも体を丸めて転がり、しっかりと手でマットを押して立ち上がることでできる児童が、30名中17名(56.7%)に増えた。

### (4)児童の意識の変容

事前と事後に行った児童33名の意識調査の結果を比べると、以下のようなことがわかった。

- ・前転がりや後ろ転がりの動きのポイントが「わかる」「まあまあわかる」と回答した児童の数が増え、学級の80%以上の児童が、動きが「わかった」と実感している(図1・図2)。
- ・動きのポイントをおさえた前転がりや後ろ転がりの動きが「できる」「まあまあできる」と回答した児童の数が増え、学級の75%以上の児童が、前転がりや後ろ転がりが「できた」と実感している(図3・図4)。
- ・マットを使った運動遊びを「楽しい」と感じている児童の割合が、事前の調査では50%を切っていたのに対し、事後の調査では80%を超え、「どちらかといえば楽しい」も含める

と学級の90%以上がマットを使った運動遊びに楽しさを見いだすことができている(図5)。

これらのことから、今回設定した指導の手立ては、一定の成果をあげることができたといえる。また、前述のとおり、児童の実感だけでなく、実際の技能も向上させることができたことは大きな成果である。この学習の上に、中学年のマット運動の学習を積み重ねていくことで、基本的な回転技や倒立技の技能を習得し、マット運動の楽しさや喜びにふれていってほしいと願っている。

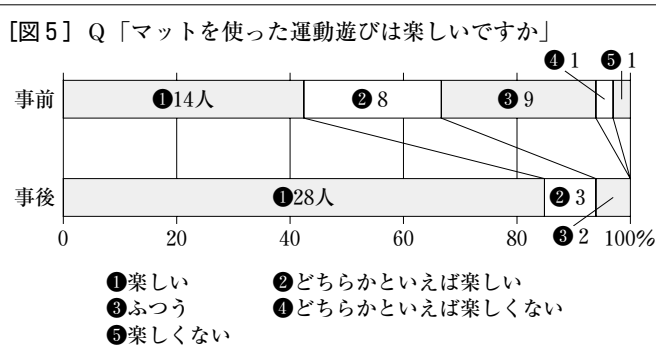
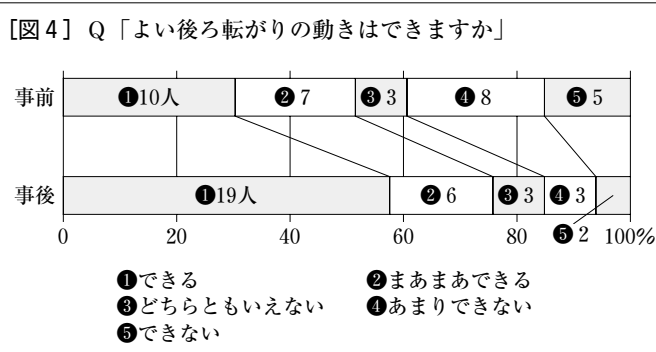
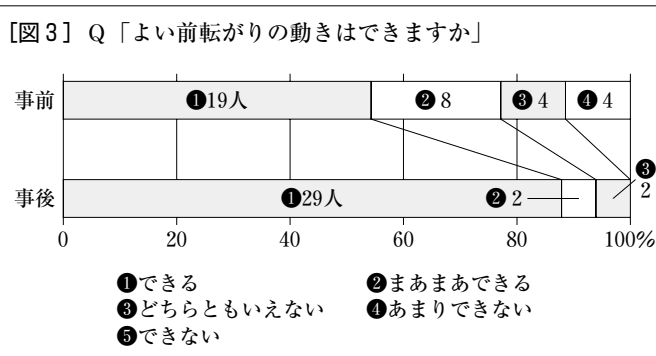
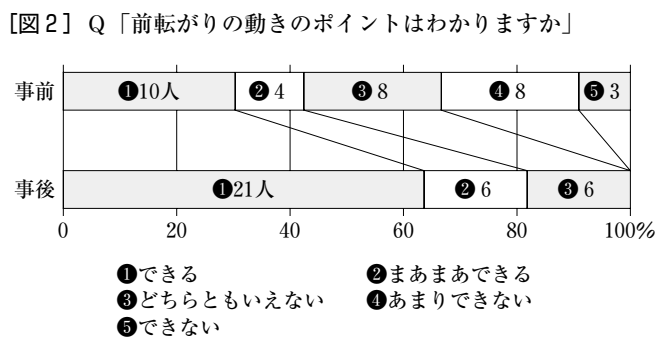
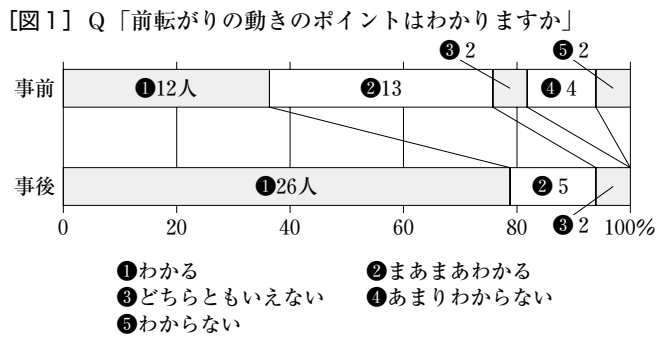
### おわりに

「デジ体」の活用について、以下のような児童の声が聞かれた。

- ・ビデオを見たことで、やる気がわいた。
- ・デジタル映像の動きを見たら、できるような気がしてきた。
- ・「デジ体」の動画を見て、動き方や練習(方法)のイメージがもてた。
- ・スローで見たり、一時停止をしたりできたので、自分の動きのよいところや悪いところがわかった。
- ・友達の動きをビデオで見てから、友達の動きをまねして同じようにやってみたらできた。頭と体がいっしょになったような感じがした。

うれしい声である。これらの声から、このデジタル映像がいかに児童の意欲を高め、思考・判断するための助力になり、技能の向上に有効なものであるかがよくわかった。

今回の実践は、私にとって「デジ体」ストアアプリ版を活用する初の試みであったため、その機能の一部を生かすにとどまったかもしれないが、児童の思考や活動の質を高めるためのツールの1つとして活用できたことは、私自身の大きな財産となった。今後は、こうした動画アプリの活用も指導の引き出しのひとつとして自分の力にしながら、運動の楽しさや喜びを味わい、進んで運動に取り組む児童の育成を目指し、日々の体育指導の充実に努めていきたい。(こでら・まさひろ)





# 男を育てる共同体の喪失

— おじさん不在の社会 —

ジャーナリスト 岡崎 満義

## 円谷幸吉の遺書に見る家族共同体

日本プロ野球のベナントレースの始まる直前に、名門・読売ジャイアンツ(以下:巨人)で、不祥事が続いた。笠原、福田、松本、高木の若い投手が野球賭博に関与したこと、清原和博容疑者が巨人時代から続く覚醒剤取締法違反(所持・使用)で逮捕されたこと。球団創設以来、「球界のリーダーたるべし、球界の紳士たれ」と厳しく選手の生活を律してきたと思われていた巨人に、こんな不祥事が起きようとは想像もできなかった。世の識者からは「伝統ある名門チームにおごりと緩みがあった。野球選手である前にまず人間教育をしっかりするべきだった。球団もNPBも甘い。この際、徹底的に調査してウミを出しきれ」と厳しい意見が相次いだ。どれももっともな意見である。巨人V9時代、「巨人・大鵬・卵焼き」といわれたときは球界の至宝“ON”の全盛時代で、そんなたるみはなかったにちがいない。この40年間で巨人の選手の質が大きく変わったということだろうか。

私がこれらの不祥事を知って直観的に思ったのは、“男を育てる共同体”が消えてしまった、ということである。男も女も今は何よりも自立することが求められる。家よりも個人の充実こそが優先される。血縁を大事にして大家族制を守ってきた社会も、経済の高度成長時代を通して次第に核家族化し、今では個(孤)族といわれることさえある。その象徴的な出来事が、1964年の東京オリンピックのマラソンで銅メダルを獲った円谷幸吉が4年後の1968年、メキシコオリンピックの年の正月、哀切な遺書を残して自殺したことである。

父上様母上様 三日とろろ美味しうございました。  
干し柿 もちも美味しうございました。  
敏雄兄姉上様 おすし美味しうございました。  
勝美兄姉上様 ブドウ酒 リンゴ美味しうございました。

巖兄姉上様 しそめし 南ばんづけ美味しうございました。

喜久造兄姉上様 ブドウ液 養命酒美味しうございました。又いつも洗濯ありがとうございます。幸造兄姉上様 往復車に便乗させて戴き有難うございました。モンブいか美味しうございました。正男兄姉上様お気を煩わして大変申し訳ありませんでした。

幸雄君、秀雄君、幹雄君、敏子ちゃん、ひで子ちゃん、良介君、敬久君、みよ子ちゃん、ゆき江ちゃん、光江ちゃん、彰君、芳幸君、恵子ちゃん、幸栄君、裕ちゃん、キーちゃん、正嗣君、立派な人になってください。

父上様母上様 幸吉は、もうすっかり疲れ切ってしまっ走りません。

何卒 お許し下さい。

気が休まる事なく御苦労、御心配をお掛け致し訳ありません。幸吉は父母上様の側で暮しうございました。

父上様、母上様から始まって、31人の肉親親族に呼びかけたものだが、少子化時代の今、こんな大家族は存在しないだろう。血縁や家風が厳然として存在した時代はすっかり過去のものになった。同時に隣近所のつきあいも希薄になり、地縁もなくなった。それでも、それらに代わって出てきたのが社(企業)縁である。終身雇用、年功序列を2本柱にした家族的経営にはまだぬくもりがあった。先輩が後輩を連れて夜ごと飲みに行く。飲ミニケーションの中で酒の飲み方、仕事のしかた、人とのつきあい方などを見よう見まねで覚えていった。しかし、それもバブル崩壊後は経済のグローバル化が始まり、能力主義・成果主義が主流となり、いささかウェットな社縁、企業共同体も姿を消した。因幡の白兎ではないが、皮をむかれて赤裸になっ

た個人が社会の中に放り出されたようなものだ。

もっとも上述の円谷幸吉の遺書について、作家の沢木耕太郎さんは「長距離ランナーの遺書」(『敗れざる者たち』(文春文庫)所収)の中で次のように述べている。

「驚くべきことは、『美味しゅうございました』という独特の繰り返しの中に、微塵も自己主張が透けてこないことであった。夭折者の特権的な輝きは、なによりもその完結性と自己表現の欲求の激しさによって増す場合が多い。しかし、円谷幸吉という若くして命を絶った者の、この異常なほどの自己表白のなさは、いったいどうしたことだろう。存在するのは血族へのメッセージである」

家族共同体の中にすっかり埋没した自己が指摘されている。しかし、円谷幸吉の自己とは、遺書の中に書き連ねた31人の血族とともにあるもの、血族とともに食べたおすしや干し柿、リンゴ、飲んだブドウ酒などの記憶も含めての自己、いわば血族と自己との融合体のような存在が自己として無意識のうちに認識されていたとも考えられる。そのように育った自己にとって、地縁、血縁、社縁を失ったとき、皮をむかれて赤裸、孤立無援の自己になったと認識されるのではなかろうか。

### 男の成長に欠かせないもの

ひと昔前の男の自己とは、そんなぬくもりのある共同体の中で育てられた。家を守るために長子に手厚い民法や、ひょっとすると世界に類のない女の内助の功に大きく守られて形成される自己であった。家の外に出たら7人の敵がいる弱肉強食の社会、おふくろの味をはじめたくさんのものに守られて、飲む・打つ・買うが男の甲斐性と尻を叩かれ、いずれ故郷に錦を飾るという世界が、いい悪いはさておき、ひと昔前の“男を育てる共同体”というものであった。

そんなものは煙のように消えた。それに加えてもうひとつ、目立たないが大きな欠落感を覚えるのは、おじ(おば)さんがいなくなったということだ。男の成長にとって、おじさんの存在は大切だ。直系の父母ではなく、いわばナナメの人間関係で結ばれるおじさんは男にとって隠し味のような存在である。おじさんはこっそり小遣いをくれる。父とは違うおじさんの職業について、その職業に

まつわるおもしろいエピソードを話してくれる。片思いの悩みを聞いてくれる。自分の失恋の話も聞いてくれる。自分が見たスポーツの話も聞かせてくれる。ピストン堀口のラッシュはどんなにすさまじかったか。白井義男がダド・マリノに勝った試合。夭折した大場政夫のパンチの切れのよさ。「勝ってもかぶっても緒をしめよ」などの奇妙な日本語を操った日系3世のボクサー、藤猛。大相撲でも、つり出し専門の“起重機”明武谷、“黒い弾丸”房錦、“潜航艇”岩風。野球の赤バット川上の弾丸ライナー、青バット大下の大きな放物線を描くホームラン。ラジオの野球中継放送の志村正順アナウンサーと解説「なんと申しましょうか」の小西得郎との名コンビ……、勝敗だけでなく人間味あふれたそれぞれのジャンルのアスリートたちの姿を、エピソードを交えて話してくれるのがおじさんであった。スポーツの細部に宿る愛すべき神について、おじさんは語ってくれる。それが少年にとってどんなに楽しみであることか。どんなに成長の糧になることか。少子化時代になって、ますますおじさんの姿は減っていきそうだ。おじさんがいない文化はどこか薄っぺらな感じがする。車のハンドルに遊びがないような社会だ。

さらにもうひとつ、今は女性に勢いのある時代である。1985年の男女雇用機会均等法の制定、男女共同参画社会の模索など、男女平等の流れは大きくなっている。それは正しい道筋なのだが、草食系男子、肉食系女子といわれるように、時代の重心は女子に傾いている。男の赤裸になった自己を育てる新しい器、共同体はまだ見つかっていない。

野球賭博に手を染めた若い4人の投手、覚醒剤に手を出した40代の清原の本当の理由は何だったのかはわからない。同時代に生きるほかの選手はそんなことをしていないのだから、特別な男たちのしでかした悪夢の出来事と割り切ってしまうのもいいのかもしれない。しかし、インターネットによる液状化した情報の氾濫の中で、自立、自己責任を迫られる赤裸の自己をどう守り、成長させていくか。自分探しをするにもおもしろいおじさん=よき他人が必要なのだが、それを見つけにくくなっている現在、それに代わるものを作れるのか、私にもいいチエがないのが情けない。

おかざき・みつよし／一九三六年鳥取県生まれ。京都大学文学部卒業後、(株)文藝春秋入社。一九八〇年「スポーツグラフィック誌『ナンバー』」創刊にあたり初代編集長となる。その後各誌の編集長を歴任し、退社後はジャーナリストとして活躍。近著『人と出会った』が岩波書店より好評発売中。

# Live Lessons <第1回> 4年・4ゴールサッカー



授業者：東京都中央区立常盤小学校教諭 **鈴木 康夫**

講評者：東京学芸大学教育学部准教授 **鈴木 聡**

参観者：東京学芸大学鈴木聡研究室ゼミ生(4年) **菅 佑也／森井 愛満**

本コーナーは、ICT機器を使用して授業をリアルタイムで参観し、授業のすぐれた点や改善点などについて講評・議論するコーナーです。

## ■本時の概略

○単元名 「4ゴールサッカー」

○単元の目標（本稿では割愛）

○児童の実態（4年生）

・体を動かすことが好きな児童は多いが、校庭や地域環境などにより、運動に適した環境がなく運動経験が不足している。

・本時の直前、総合の時間にて「ブラインドサッカー」の授業があったことから、ブラインドサッカーを経験させる準備として、1、2時間目はゲームをせずに、ボール扱いの練習をメインに行っていた。

・本ゲームを行うのは、本時が初めて。まず団子状態から、拡散していけるようになることを目指して本時を行う。

○本時のねらい

・ゲームのルールを知り、友達と協力して運動に取り組む。

・「空地」を見つけ、そこに動いたりボールをもらおうと声を出したりする。

○本時の展開（3/6時） 右表参照

時	主な学習活動
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○整列、あいさつをする。</li> <li>○本時の活動、めあて、ゲームの方法を知る。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">                     ルールを知り、チームで協力してたくさん点を取る。                 </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・手は使わない。</li> <li>・得点したら中央から始める。</li> <li>・線から出たら、出たところから足で始める。</li> <li>・どこのゴールにシュートしてもいい。</li> <li>・最後に触った人の得点になる。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>○準備運動をする。</li> </ul>
展開 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○試しのゲームをする。</li> <li style="padding-left: 20px;">A対B 審判C 練習D</li> <li style="padding-left: 20px;">C対D 審判A 練習B</li> <li>○チームごとに試合を振り返り、作戦を考え練習する。</li> <li>○確かめのゲームをする。</li> <li style="padding-left: 20px;">A対B 審判D 練習C</li> <li style="padding-left: 20px;">C対D 審判B 練習A</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○片づけをし、整理運動をする。</li> <li>○振り返りをする。</li> <li>○あいさつをする。</li> </ul>

※この講評は東京学芸大学鈴木聡研究室にて、テレビ会議システム「FreshVoice」（エイネット株式会社）を使用し、2016年3月3日に行われたものです。

※現地中継スタッフとして、鈴木聡研究室ゼミ生の鴨下連郎さん（大学院）、粕谷真帆さん（4年）にご協力いただきました。

## ■導入

鈴木 ゼッケンをズボンの中に入れておきますね。すごくいいです、ゼッケンを事前に入れておきます。安全面と学習規律の面で大切です。

ボードを使ったりして、誰にでもわかるように流れを示すというのも、ユニバーサルデザインでいいですね。見通しが立ちます。あと、大きな資料を蛇腹に折ってあるのは工夫ですね。目線を下げて、しゃがんで話しているのもいいです。

森井 こういうの、教育実習でもなかなか自然にやるのは難しかったです。

鈴木 気をつけていてもなかなかできない、という部分ですよ。

コートを見ると、ゴールが4つあるみたいですね。

菅 どのゴールでも自由に攻められる、ということですか。

鈴木 そういうことですね。どこにシュートを入れてもいい、と。だから、相手チームの子に当たって入ると、相手チームの得点になるんですね。

## ■展開

## (1) 試しのゲーム

鈴木 4ゴールサッカーの特性から考えると、団子状態から散らばるようにすることがひとつの目的なのでしょうか。そこに気づいていけるかというところもポイントですね。待ち伏せしたり、ポジショニングしたりという動きが出てくるかどうか。

実際、ゴール前の子は待ち伏せしてるのかな。今、教師行動としては「赤ボール！」みたいな、状況説明や審判役ですが、もっと「1番の子空いてるよ」という具体的な声かけをすればいいですね。今は、あえてこうしてるのでしょうか（※授業者より：特に1回目の「試しのゲーム」では、技能や思考・判断に目を向けさせるのはもう少し後の局面だと思ったので、まずゲームを理解して楽しませることが大切だと考えていました）。

菅 多分この後、課題が「空地」、スペースを見つけることになっていくんでしょうね。

鈴木 人数とコートの広さの関係で、スペース自体がなかなか生まれづらいね。ゴールも、どこに入れてもいいとなると、なかなか難しいのかな。攻めと守りが分けづらくて。攻める、守るという意識がないと、パスを出して向こうで入れよう、という意識に多分ならないと思うんですよ。ス

【写真1】ゴール前、団子状に固まっている



ペースを見つけるというより、その場でゴチャゴチャやっちゃってしまってますね（写真1）。

森井 作戦を考えにくそうな印象もありますね。

菅 現状では、スペースを見つけるというよりは、「とにかくあのゴールにボールを通そう」、という感じになっている気がします。

鈴木 挑戦課題が、それだけになってるのかな。

菅 サッカー部の練習では、ゴールの数より1人少なくするくらいの人数でやることがあります。そうすると自然とどこかのスペースが空くので、そこを探すようになっていきます。

鈴木 なるほど。4つあったら、3人、ということ。もしもっとコートが広がったら、そういうふうにした方がいいのかな。授業者の先生もそう思ってるんじゃないでしょうか。

菅 コートの大きさが課題になりますね。

鈴木 先生は広がらせたいみたいですね。でも、なかなかそこに子どもの考えが向いていないみたい。それと、先生が持っている画板が気になりますね。評価しながらやってるのでしょうか（※授業者より：チームの名簿をもっており、展開の中盤でチームが考えた作戦なども記していました。チームにあった声かけをしたかったので）。

菅 見ていると、ボールが外に出たら、出た場所から始めるじゃないですか。これ、子どもたちを散らばらせるために、外に出たら先生のところから始めるみたいな工夫もできるかもしれませんね。

鈴木 先生がボールを転がして、とか？

菅 リスタート場所からだと、なかなか出ていけない気がします。

鈴木 打開しづらいですよ。そういう工夫はいいですね。こういう状況の中で、「散らばっていく方が有利だ」と子どもが本当に思わないと、やはりそうならない。子どもの中で、もっと切実性が生まれるといいかもしれません。



【写真2】先生を交えて、作戦を考える



## (2) 作戦を考える

鈴木 各チームが考える作戦を、先生がどう想定しているかがポイントですね。通常、指導案ではなかなかそういう部分まで書かれないですが、作戦の想定は、絶対にもっているべきだと思います。鈴木先生もきっともっていると思います（※授業者より：「ゴールごとに担当を決めて、シュートを決める」「相手がいらないほうにパス」「マンツーマンディフェンス」といった作戦が、まず出てくると想定していました。作戦を考えるにあたっては、「こうしたら？」より「どうしたらいい？」と声をかけ、考えさせることを重視しました。）

先生は、作戦会議中の子どもたちの中に入って、実態を把握していったわけですね（写真2）。どんな話をしてるのかな（※注：1対1でマーク、パスをつなぐ、四角形に広がる、など）。子どもの話を聞いていると、やっぱり散らばろうという話にはなってるんですね。おもしろいですね。

## (3) 確かめのゲーム

鈴木 少し散ってますね、さっきと比べると（写真3）。やっぱり作戦タイムは大事ですね。団子にならず、この散らばった状況をキープしてられるかどうか。次に、明らかにパスしようという意識が出てきていますね。こういうふうには、散らばったり長いパスが通ったときに褒めてあげるなど、もっとフィードバックして共感してあげると、なおいいなという気がしますね。

森井 あっ、次の試合はまだ団子ですね。やはり、ゲームが難しいんでしょうか？

鈴木 だけど、この状況ではしょうがない部分がありますよね。もっと人数が少なければいいのでしょうけど。先生もそう思ってるんじゃないかな。

でもゲーム的には、発想としてはおもしろいですが、やはり何を狙わせるかというのがなかなか

【写真3】作戦会議後、散らばる子どもたち



子どもには見えづらいかもしれませんが。

菅 密集から抜け出すように工夫をしていくと、スペースを見つけることに関してはさらに気づきが起こりやすいかな、とも思います。

鈴木 ゴール前の局面でどちらのチームもゴールを狙える状況というのは、チャンスを保証しているようで、むしろやりとりを難しくしてしまっているという一面もある気がしますね。

その場で点を「入れよう—防ごう」、とめまぐるしく変わるので、空いているゴールにいる味方に渡そうというのは相当客観視しないとできないかもしれません。ただでさえ足でボールを操作するのは難しいので。だけど子どもたちは、みんな積極的にゲームにかかわっていてすごくいいですね。

森井 盛り上がってましたよね。

鈴木 子どもはおもしろいんでしょうね。そのおもしろさと、空地を見つける、パスしながら戦術的にやる、ということをつなげるのが難しいのかな。かといって、グリッドをつくるのもなんだか違う気がしますよね。

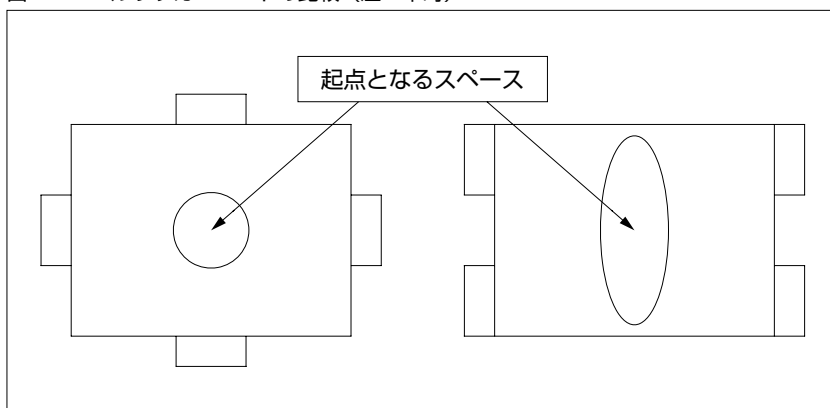
森井 C対Dが試しのゲームをしていたときに、縦のラインで往復しているシーンが見られて、ふと横のゴールはいらんじゃないか、と思ったんです。さっき菅さんも、4ゴールゲームと聞いたときに、縦長のコートにそれぞれゴールがあるイメージをした（右図）、と言っていて。

菅 そのほうがスペースはできますよね。

鈴木 それだと、片方に人が寄ったときにもう片方が空くからいい、ということ？

菅 本時のゲームの場合だと、コートの狭い中心部を起点に、どこを攻めようかと考えると思うんです。となると、ゴールとの距離が近くなって、密集しがちになるんですね。でも、先ほどお話しした4ゴールサッカーでは、コートの中央近辺の

図：4ゴールサッカーコートの比較（左：本時）



もう少し広い部分が起点になると思うんです。そこで、そのスペースに人を置こうとか、作戦が出てくるのではないかと。縦の距離も長いですし。

鈴木 確かに。それだけでも、起点が2つに分散される可能性があるかと。

菅 言われてみると、本時のゲームの4ゴールは、全部のゴールが近距離ですよ。となると、コート真ん中の小さいスペースしか起点にならない、ということですね。そこで、そういう4ゴールサッカーもアイデアとしてあるのではないかと。その場合も、どのゴールに入れてもいい？

菅 そうですね、それでもかまわないと思います。

あと、ボール扱いのできる子たちがすごく多いので、方向転換の動きがあれば、もっと空いたスペースに行けそうですね。

鈴木 確かにボール扱い、うまかったですよね。女の子も足のうらでちゃんと止めて。なんでだろう（※単元計画内「児童の実態」参照）。

菅 女の子でも、よくあるのは、足のうらで止めようとして止まらずに後ろに抜けてくようなイメージだったんですが。全然そういう子もいなかったの、びっくりしました。

鈴木 だから僕らも戦術的な動きを中心に見られ

たんですね。戦術が実現できそうだから。そういう下地はしっかりしてましたよね。待っている時間も長いのにダレてもいなくて、しっかり仲間のプレーを見ていました。

### ■まとめ

鈴木 片づけをしてから整理運動をするみたいですが、通常だと、主運動が終わって整理運動をして、その後に話し合いとか片づけになるんですよ。意図はあるのでしょうか（※授業者より：挨拶してから一部の用具係などが片づけるようにするより、「みんなで使うものはみんなで準備、片づけをする」ということを個人的にも大事にしたいと思っています。挨拶したら、教室に戻るだけにしています）。でも、全体的に、先生の指示がすごく明確で、子どもたちに届いていましたね。

本日は、大変ありがとうございました。（談）

### 授業者（鈴木康夫先生）より

このたびは授業を見ていただき、ありがとうございました。子どもたちの学習意欲やボール操作技術の高さを評価いただき、非常にうれしく思います。直前に体験していたブラインドサッカーで学んだ声のかけ方やボールの扱い方も本時の学習で生かされていました。様々な経験をするのが重要であるとあらためて感じる事ができました。

その後の授業では、ゲームの時間だけでなく、攻め方を工夫できるように話し合いの時間も多く確保しました。

今後は、鈴木聡先生からいただいたご指導をもとにゲームのルールやゴールの設置場所など、様々な課題を改善できるように再度挑戦していきたいです。

### 講評者（鈴木聡先生）より

鈴木康夫先生、参観させていただきありがとうございました。子どもたちがはつらつとサッカーに取り組む姿が、画面を通じてわかりました。ワイヤレスマイクを通じて、先生や子どもたちの話し合いの声まで研究室でしっかりとモニタリングできました。学習規律が整っていて、学び方が身につけている子どもたちだからこそ、サッカーを楽しむだけでなく、工夫して攻めたり守ったりする質の高いゲームになったのだと思います。まもなく現場に出ていく学生とともに参観させていただきましたが、鈴木先生の教師行動は、学生にとって最高のモデルとなりました。今度は、ライブ中継ではなく、鈴木先生の「生の授業」を参観させていただき、またぜひ学ばせていただきたいです。

LiveLessons 授業者募集中！  
アドバイスはほしい！  
「お問い合わせ」ページより、メールにて体育担当宛にご連絡ください。  
本コーナーでは、「授業を見てもらいたい！」「どうしたらいいのか、弊社ホームページ内